尾垂観音

―尾垂観音新隆寺の百観音―

横芝光町教育委員会

はじめに

令和元年９月１６日未明に房総半島を襲った台風は、千葉県に甚大な被害を及ぼした。横芝光町内の文化財も少なからず被災し、中にはお寺の山門が吹き飛ばされて倒壊したところもあった。ここに取り上げる尾垂新隆寺も屋根が吹き飛ばされ、雨漏りの危険があることが早々寺檀家から連絡があり、早速、町文化財審議会副会長の橋浦氏と状況調査に赴いた。被害のあった堂宇は方三間堂、屋根は銅板葺きで、これが台風によって三面の銅板がめくれたり飛ばされていて、屋根組が露出した状態であった。そのため雨漏りの危険があり、堂内仏壇の仏像が２次被災するおそれがあることわかった。そこで檀家、橋浦氏と協議のうえ、仏壇内仏像と書画類を町で一時預かりし、これを機会に同寺仏像の調査をすることにした。仏壇は中央厨子とその両脇に別室の厨子があり、中央には主尊の十一面観音、両脇室には多数の仏像が埃を被って乱雑に入っていた。脇室はその状態から100年近くは手が着けられていない様な状態で、像、蓮台、台座などは別々に折り重なっていた。これらを全て取り上げ、持ち帰って洗浄し、補修できるところは直す作業を進めることにした。それと同時に、このことを仏像に詳しいの千葉県文化財課の植野英夫氏（現千葉県立中央博物館）に連絡、早々植野氏が調査に訪れて実見し、その報告書を簡潔にまとめて頂いたのが、１～２頁の報告書である。とりあえずこの２月までに簡単な補修作業をし、それをまとめたのが本書である。

洗浄、補修作業の結果、主尊を含めた仏像の数は、観音像が99躯あり、植野氏が指摘された百観音であることが確実となった。しかし、99躯であるのは洗浄の結果、観音像が99躯であるのに対し、台座が一組余り、当初は百観音あったと推定された。写真には100躯の像を載せたが、その内６は菩薩形でこれは観音像と別に考えた。植野氏の指摘により、県内では数少ない木造百観音であることから、審議会副会長と相談の上、この百観音を町指定有形文化財にすることにし、令和３年２月１日付けで指定した。これによって百観音をより良く保存することによって、後世へ残す手だてを得た。観音像は中央厨子の主尊の他、４躯の聖観音が多数の観音像と異なり、個性的であることから別々に造られた仏像で、ほか94躯は立像高30㎝前後、坐像高17㎝前後の観音像で、仕上げがほぼ同一であることから、百観音として造補されたものと推定される(伊藤重雄家文書に、文化７年観音像修復の勧進の記録)。植野氏の群像とした観音像はこれにあたる。制作年代については植野氏の記述があるので、それを参照願いたい。

本観音の指定にあたっては下記の方々のご協力を賜った。ここに記して御礼申し上げます。（敬称略）

新隆寺住職　柴田　敦
新隆寺檀家総代　伊藤　周一
知足院檀家総代　伊藤　智茂
新隆寺役員　鵜之澤　昇治
千葉県立中央博物館　植野　英夫
横芝光町文化財審議会副会長　橋浦　芳朗
横芝光町歴史ロマン研究会

目次

はじめに
目　次
例　言
1　尾垂観音調査報告書（植野　英夫）　1
2　主尊・聖観音　4
3　十一面観音　10
4　千手観音　14
5　如意輪観音　19
6　馬頭観音　20
7　墨書銘　21
8　その他の仏像　22
おわりに

例言

尾垂百観音は令和３年３月に、新指定企画展として公開する予定であったが、公開できなくなったため、この図録を紙上公開として制作した。

尾垂百観音は、千葉県山武郡横芝光町尾垂イ－７７５に所在する真言宗智山派新陸寺順礼堂に存する。

尾垂百観音は令和３年２月１日付けで、横芝光町有形文化財（彫刻）に指定された。

写真番号の左右は脇室の分別で、その次の番号は整理番号である。

整理の結果、聖観音36躯、十一面観音24躯、千手観音19躯、如意輪観音８躯、馬頭観音２躯の、合計99躯である。

洗浄・修復した像と蓮台・台座とを組み合わせた結果、全像用台座が一組余った。像と台座の組み合わせは照合は不可能のため任意である。

本書掲載仏像のうち、３頁６は菩薩形であるため、指定からはずした。

百観音は現在、横芝光町教育委員会で保管している。

本書の編集は　道澤　明があたった。

新陸寺順礼堂

1　尾垂観音調査報告書

植野　英夫

1　名称
　尾垂観音（おたれかんのん）
2　員数
　一式
3　所在の場所
　千葉県山武郡横芝光町尾垂イ－775　新隆寺本堂（順礼堂）
4　所有者の氏名又は名称および住所
　宗教法人　新隆寺（新義真言宗智山派）
5　種別
　有形文化財（彫刻）
6品質及び形状
（1）形状
①本尊
　垂髻。紐一条の天冠台下の地髪は粗く筋彫り。髻頂に仏面、地髪正面に化仏坐像（胸前で拱手）を、天冠上に化仏６面、上段に４面を配する。仏面は如来形で地髪に浅く筋彫りがある。経軌に依れば、化仏面は菩薩・瞋怒・牙上出面に造るが、本像の化仏は小さいため表情までは確認しがたい。白毫相は表わさない。彫眼。鬢髪は耳をわたる。三道を刻出する。裙をはき、衲衣を着し、両肩を覆い、両腕から膝高まで垂らす。通常の菩薩がまとう条帛や天衣ではなく如来形の服制を表わす。両手は胸前正面で蓮台を捧げ持つ。両足先は裙から出す。基台下に枘を造り台座に直立する。
②群像
　聖観音、千手観音、十一面観音、如意輪観音、馬頭観音等から成る。この他、不動明王、阿弥陀如来、地蔵、弘法大師、大黒天像などもあり、当地における観音信仰以外の尊像も混在している。観音像は本尊と相違し、条帛・天衣の菩薩形の服制を表す。
　１躯毎に台座に竹釘或いは足枘で固定される、光背は一重の円光背。
（2）品質・構造
①本尊
　足枘から髻頂の仏面、各化仏、持物の蓮台まで一木で造る。枘の木肌から材質はスギ等の針葉樹。全面素地。化仏や基台縁辺に金色が認められるが、後補の台座の表面塗料が付いたものである。胸飾（金属製・後補）を着す。
②群像
　一木造り。面部を剥ぐ像があり、千手・十一面・如意輪観音像の多手像は脇手を別材としている。材質はスギ等の針葉樹。仕上げは、当初は金泥彩、後に塗り直しがあり現状は赤褐色を呈する。保存状態の良い像の頭部は群青彩を残している。頭飾・胸飾は型抜き銅板を銅釘止め。
7　法　量
①本尊

像高	３９．６	髪際高	３０．６	天冠台から上	７．８
耳張	５．３	肘張	９．８	腹奥	６．５
基台幅	８．１	基台奥	５．５		

後補舟形光背付き台座　高５８．２　　［単位：cm］
②群像
　像高は２０から３０cm
8　作者
　不明
9　制作年代
　江戸時代
10　伝来
①伝承
　「尾垂観音」と通称される。
②『千葉県匝瑳郡誌』(千葉県匝瑳郡教育委員会、大正10年)白浜村項
　「順礼堂
　　本村大字尾垂第五区杢代内に在り新義真言宗に属し匝瑳郡南条村虫生中本寺広済寺の末派なり承応二年三月叶照上人之を創建す境内三百十二坪」
　　（承応二年は西暦1653年）
③順禮堂改修記念碑銘（昭和53年境内に建立）
　「　　碑文
　阿庶一睨スレバ業壽ノ風定マリ多疑三唱スレハ無明ノ波涸ン夫レ古称順禮堂観音堂ハ去ル承應二年叶照上人ノ開基ニシテ爾来三百二十有余歳本尊十一面観世音菩薩ノ霊徳十方ニ利益ヲ与ヘ近隣郷中信仰ノ老若男女参詣シ霊堂ノ威光益々輝運ヲ極メタリト謂ヘドモ近年堂宇ハ悉ク老朽ノ一途ヲ辿リ其ノ観誠ニ哀切に堪ヘズ現住入山以来是レガ再建ノ悲願ヲ抱イテ二十有余星霜茲ニ時至リ機熟シ当堂大改修ヲ發願ス依ツテ沙門堯宥当区両寺總代区民代表名士各位相集リ相携ヘ打ツテ一丸本願浄財位壱千萬圓募財達成ノ大勤進ニ精励ス幸ナルカナ十方ノ有縁檀信徒各位是レガ苦衷ヲ哀愍納受シ絶大賛助ノ浄志ヲ賜ウ誠ニ慶ビニ堪ヘズ巣仍ツテ茲ニ大願成就落慶ノ佳辰ヲトシ浄業賛助役員各位ノ芳名ヲ録示シ其ノ功ヲ永代ニ残サント念ズ時ニ天光明ニシテ眼前ノ木石悉ク佛性ヲ現ス善男善女随喜ノ顔恰モ錦秋ノ麗華ニ似タリ懇ヒ願クバ本尊観世音菩薩再ビ無盡ノ霊徳ヲ発光シ佛法興隆當山繁栄国家安穏萬民豊楽殊ニハ浄業賛助檀信徒各位倍々隆昌シソン萬福ヲ祈願懇従祷ス
　　維干　昭和五十三年十月七日
　　下総尾垂順禮堂主管　新隆寺忠孝第二世住職
　　阿闍梨耶　権大僧都堯宥啓白」
　（後略）」

11　説明

令和元年９月の台風により新隆寺本堂屋根が吹き飛ばされ、堂内にあった諸尊像は横芝光町所管の建物に一時避難し、現在、清掃等の作業が行われている。この被災によって、これまで「尾垂観音」と通称されていたものが、百観音であることがわかった。

百観音とは、西国三十三番札所、坂東三十三番札所、秩父三十四番札所の合計百の札所、百の観音像巡拝の意味である。西国札所は平安時代末期、坂東札所は鎌倉時代（13世紀前半）、秩父札所は室町時代（15世紀後半）に成立したと伝えられ、これら三つの霊場をめぐる百番巡礼は天文年間（1532～1553）には行われていたことが知られている。

観音霊場に係わらず、四国八十八箇所札所などの祖師信仰、更には富士山・出羽三山等の山岳信仰も含め、霊場巡拝は江戸時代以降庶民の間で大変な流行を見せる。各地に残る絵馬、奉納額、記念碑がそうした流行を物語る歴史的な資料である。霊場巡拝をもっと身近で手軽にできるようにして成立したのが霊場の写しである。尾垂観音を参拝することで西国・坂東・秩父の三霊場を巡る御利益が期待されたものである。

また、江戸時代は「百」「千」などの大数を冠した多仏信仰も盛んとなる。「百庚申」(印西市浦部・柏市増尾ほか多数)、「百地蔵」(柚ケ浦市延命寺)、「千体地蔵」(君津市久原寺)などである。

尾垂の百観音の創始については、『千葉県匝瑳郡誌』の順礼堂創建の承応二年(1653)が参考となる。現在境内に残る歴住墓塔は享保年間以降で承応年間を遡る銘文は確認できないことからも、順礼堂創建はこの頃と見て差し支えない。

また、今回の一時避難で、下記の通り２つの墨書銘が群像の台座裏から発見された。

群像の台座裏墨書名（P20　103）　　群像の台座裏墨書名（104）

「百観音
　惣仕福
　下サ州
　　古内村」

「下サ國
　北清水村
　伊藤森吉倅
　上サ國
　屋形」

群像の台座裏墨書名

「十一面観」

年紀は記されていないが江戸時代である。この銘は作者というよりは、寄進者の名前であろう。古内村が現在の香取市古内（旧山田町古内）であるとすれば、尾垂百観音は郡域を超えた信仰圏を背景に成立したものと考えられる。

現在、「尾垂観音」の言葉は地元でもよく聞かれるが、「百観音」であることは伝えられていない。新隆寺境内入り口には、西国札所巡拝に係る記念碑が数基建っている。西国巡拝記念碑（明治30年）、西国巡拝記念塔（明治33年）西国拝礼記念碑（大正11年）等である。この頃までは、現地の札所参詣も盛んであったことを裏付け、その後の巡拝の機会が途絶えたことで、百観音の名称も次第に忘れ去られたものといえる。また、「順礼堂」という建物呼称からも、百観音の写し霊場を順礼することを目的に創建されたものと考えられる。

百観音に関する県内の事例では、匝瑳市妙覚寺の百観音（安政３年・石造像容塔）、印旛郡栄町大乗寺の百観音（寛政10年・石造像容塔）等が知られている。これらと比較し、尾垂の百観音は観音像が木造であることが他にはない特徴である。栃木県佐野市の観音寺の百観音のように鋳物の事例もあるが、県内では前述のような石造物の例は知られているが、木像の例は現在のところ他に知られていない。

本尊の十一面観音は、経軌には見えない、如来形の服制を示すこと、正面から見た右肩に掛る衣が背面側から見た場合につながらないこと、また、両手で蓮台を捧持する姿も極めて特殊であることから、在地の人物による制作と考えられる。

12　保存上の留意事項

・本尊の状態は良好である。

・群像について、現状では虫損・鼠害の跡は見受けられないが、湿潤な環境下での腐朽菌による劣化、仕上げ材の被膜剥離、像・台座ともに接着面の遊離が全体に及んでいる。定期的な厨子の開扉と目通し・風通しが必要である。

・今後の管理については、堂修繕の後に堂厨子内に戻し、新隆寺檀家及び区民の理解のもと、保存・管理されるのが望ましい。

13　その他参考となるべき事項

・千葉県匝瑳郡教育会編集・刊行『千葉県匝瑳郡誌』(大正10年)

・真野俊和編『講座にほんの巡礼第一巻　本尊巡礼』（有山閣出版、平成８年）

・千葉県教育委員会編集・刊行『文化財実態調査報告書―絵馬・奉納額・建築彫刻―』(平成８年)

その後、植野氏から、県内での他の多仏信仰の事例が、下記の通り追加の事例があるとの報告を頂いたので、ここに追記する。

多仏信仰の県内事例

・百体観音　長南町蔵持・全応寺（曹洞宗）

・百体観音　いすみ市岬町鴨根・清水寺（天台宗）

・千仏堂（千体阿弥陀）　流山市鰭ケ崎・東福寺（新義真言宗智山派）

被災直後の新隆寺順礼堂

被災直後の順礼堂内部

右脇室内の取り出す前の観音像

修復後の巡礼堂内部

2　主尊・聖観音１

１主尊　十一面観音立像
像高39.6cm

２　聖観音立像
左１
像高35.4cm

３　聖観音立像
左９
像高46.5cm

４　聖観音立像
右15
像高25.3cm

５　聖観音坐像
左21
像高21.8cm

６　菩薩形立像
左22
像高38.6cm

7　聖観音立像
右10
像高27.6cm

8　聖観音立像
左12
像高28.5cm

9　聖観音立像
右14
像高27.3cm

10　聖観音立像
左４
像高27.8cm

11　聖観音立像
左16
像高29.2cm

12　聖観音立像
左19
像高27.2cm

13　聖観音立像
左66
総高27.5cm

14　聖観音立像
左64
像高27.5cm

15　聖観音立像
左59
像高29.7cm

16　聖観音立像
左27
像高29.5cm

17　聖観音立像
左30
像高27.2cm

18　聖観音立像
左32
像高27.2cm

19　聖観音立像
左35
像高26.8cm

20　聖観音立像
左40
像高27.3cm

21　聖観音立像
左42
像高29.3cm

22　聖観音立像
左53
像高27.0cm

23　聖観音立像
左58
像高27.2cm

24　聖観音像
左62
像高27.3cm

25　聖観音立像
左68
像高27.5cm

26　聖観音立像
左50
像高27.5cm

27　聖観音立像
左72
像高26.7cm

28　聖観音立像
左57
像高27.5cm

29　聖観音立像
左26
像高27.3cm

30　聖観音立像
左36
像高22.0cm

31 聖観音立像
左20
像高28.3cm

32 聖観音立像
左69
像高27.8cm

33 聖観音立像
左71
像高29.1cm

34 聖観音立像
左46
像高28.4cm

35 聖観音立像
左39
像高29.2cm

36 聖観音立像
左14
像高28.6cm

2　十一面観音１

37　十一面観音立像
左5
像高30.2cm

38　十一面観音立像
左6
像高30.3cm

39　十一面観音立像
左33
像高30.5cm

40　十一面観音立像
左3
像高30.1cm

41　十一面観音立像
左25
像高30.5cm

42　十一面観音立像
左41
像高30.5cm

43　十一面観音立像
左28
像高27.4cm

44　十一面観音立像
左18
像高27.7cm

45　十一面観音立像
左24
像高27.6cm

46　十一面観音立像
左31
像高27.2cm

47　十一面観音立像
左63
像高27.3cm

48　十一面観音立像
右9
像高27.8cm

49　十一面観音立像
左61
像高30.5cm

50　十一面観音立像
左67
像高26.3cm

51　十一面観音立像
左51
像高26.0cm

52　十一面観音立像
左55
像高27.5cm

53　十一面観音立像
左29
像高26.2cm

54　十一面観音立像
左46
像高28.5cm

55 十一面観音立像
左10
像高27.5cm

56 十一面観音立像
左17
像高27.3cm

57 十一面観音立像
左45
像高29.0cm

58 十一面観音立像
左44
像高28.5cm

59 十一面観音立像
左43
像高27.6cm

60 十一面観音立像
右13
像高27.6cm

61　千手観音立像
右２
像高28.5cm

62　千手観音立像
右３
像高30.4cm

63　千手観音立像
右４
像高30.3cm

64　千手観音立像
右１
像高30.8cm

65　千手観音立像
左65
像高30.4cm

66　千手観音立像
左11
像高31.2cm

67　千手観音立像
左13
像高28.7cm

68　千手観音立像
右21
像高27.3cm

69　千手観音立像
右7
像高27.5cm

70　千手観音立像
左23
像高27.7cm

71　千手観音立像
左37
像高30.8cm

72　千手観音立像
左70
像高30.5cm

73　千手観音立像
左49
像高30.8cm

74　千手観音立像
左54
像高30.5cm

75　千手観音立像
左52
像高22.5cm

76　千手観音立像
右5
像高29.7cm

77　千手観音立像
左47
像高30.8cm

78　千手観音立像
左6
像高30.6cm

79　千手観音立像
右11
像高30.5cm

80　千手観音立像
左34
像高28.4cm

81　千手観音立像
左15
像高30.2cm

82　千手観音立像
右8
像高30.5cm

83　千手観音立像
左12
像高28.1cm

84　千手観音立像
左2
像高29.7cm

85　千手観音立像
右6
像高28.0cm

86　千手観音立像
左60
像高27.9cm

87　千手観音立像
左38
像高28.3cm

88　千手観音立像
左7
像高29.2cm

89　千手観音坐像
右22
像高17.5cm

90　聖観音立像
左9
像高30.5cm

5　如意輪観音 1

91　如意輪観音坐像
右16
像高18.0cm

92　如意輪観音坐像
左23
像高17.4cm

93　如意輪観音坐像
右24
像高17.4cm

94　如意輪観音坐像
左73
像高17.5cm

95　如意輪観音坐像
左74
像高15.8cm

如意輪観音２、　６　馬頭観音

96　如意輪観音坐像
左75
像高17.0cm

97　如意輪観音坐像
左76
像高18.0cm

98　如意輪観音坐像
左77
像高17.5cm

99　馬頭観音坐像
右17
像高17.8cm

100　馬頭観音坐像
右18
像高17.7cm

7　墨書銘

101　顔面裏
18　左32

102　顔面表裏
70　左23
玉眼を嵌めた観音顔面

103　台座墨書
25　左68台座

左68台座裏

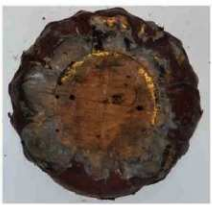
104　台座墨書
2　左1の台座と
思われる

105　台座墨書
83　左12台座

106　台座墨書
30　左36台座

107　台座墨書
87　左38

108　台座墨書
56　左17



109　蓮台墨書
53　左29

110　蓮台墨書
78　左6

111　像面地墨書
29　左26

8　その他の仏像

112　木造地蔵菩薩

113　木造不動明王

114　木造地蔵

115　木造神像

116　木造菩薩

おわりに

百観音を洗浄・修復していく過程で、様々なことが明らかになった。台座墨書では前頁２点（105・106）が新たに見つかり、これだけでなく一字墨書も多くあった。また多くの像は首が嵌め込み式で、中には102のように顔面を割いで目の部分を刳り貫き、玉眼を入れているのが認められたり、101のように割いだだけで墨書記号を書いているものもある。群像はその像形が細身で丁寧に彫り仕上げたものと、ずんぐりして簡略に造っているものとの、大きく２つに分類でき、工房内の職人の違いの可能性が考えられる。群像の全ては制作時は漆地（黒多）に金泥彩仕上げで、素地仕上げは主尊のみ、彩色仕上げが４で、百観音のうち98軀が金色に輝いていたことは荘厳であったろう。特に２は素材が他の像と比べて重く、硬質材を使った良好な作で、３は他より像高が高く、傷みが著しい。おそらく３が最も古く、２・５がそれに注ぐと推定され、１が現在の主尊であるが、時間の経過とともに主尊（本尊）が入れ替わっていったのかもしれない。そして、江戸前期、百観音信仰の隆盛に伴って群像が増補され、それが下火になると脇へよけられ、忘れ去られていったのかもしれない。

当地域では観音信仰が江戸から明治頃まで長く継承され、多くの観音像が造立されたが、今日、そうした信仰のみだけでなく、宗教そのものへの関心も薄くなり、お寺や神社が見捨てられ、廃墟となっていくところが増えている。

尾垂観音
―尾垂観音新隆寺の百観音―
発行日　令和３年３月20日
編集・発光　横芝光町教育委員会
印刷　三陽メディア株式会社

尾垂観音新隆寺